

週報

1994年1月9日 降誕節第3主日

巻14 41号

1993年度教会主題

「キリストが私たちの内に形づくられる」

聖句 二人は言った。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。」そして、看守とその家の人たち全部に主の言葉を語った。

使徒言行録 16章31節～32節

- 目標
1. 生活を整えて礼拝、諸集会を守る。
 2. 教会の組織を再検討し、キリストの体を作る。
 3. 家族こそって主イエスを賛美する。

日本キリスト教団

横浜港南台教会

〒233 横浜市港南区港南台 7丁目-8-29

電話 045-833-5323 振替 横浜 9-13994

牧師 秋吉 隆雄

牧師宅 電話 045-833-6616

往生を遂ぐ。まして悪人をや」という言葉に通じる。不信のない信仰などない。むしろ信仰は不信が生み出すものである。私たちの生活においても、罪と恥と怠惰でありながら、同時に義と聖と勤勉にあこがれている。人間の持つこの相反する二重性を、突き放して見て「ユーモア」「おかしみ」と言っておられる。

信仰を倫理や論理でとらえることは充分でない。一面的な倫理的追及は律法主義になり、論理的整合性だけを求めるとイデオロギー万能主義になる。誰もこれが真実だと自分の手中には握めない。

「猿も木から落ちる。落ちたらまた登る」とある禅寺に立て札が掛けられていたそうである。この自由さが氏の生き方のように思える。人間の生はすべて中途半端な途上にある。目的を手中にしている途上性こそが現実で、そこに夢や憧れを持つ人間的な営みがある。人の死は悲しい。しかし、それさえも「ユーモア」「おかしみ」と観ずることが人間であることの最後の砦ではないかと。

一牧師室から一

小田垣雅也氏の「四季のパンセ」を興味深く読んだ。氏は国立音楽大学で宗教と哲学を講じておられる。柔らかな知性と美しい言葉、そして深い精神でとらえた信仰に感激した。氏は人間存在を「ユーモア」あるいは「おかしみ」と理解している。ルターは「罪人にして同時に義人」と言った。彼は罪に苦しみ抜け出そうとしたが、出られなかった。イエス・キリストの十字架による贖い、即ち神は人間が罪人か正しいかを問わず一方的な恵みによって「義」としてくださることを発見した。これが「善と悪」を越えた彼岸からの福音である。親鸞の「善人なおもて